様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月２２日現在

機関番号：１１４０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５３０９７１

研究課題名（和文）郷土の音楽素材の教材開発と大学教員のアウトリーチによる実証的研究

研究課題名（英文）A Study of Material Development in Music Education for Utilizing "Raw Materials of Music in the Community" and the Outreach Activities by College Teachers

研究代表者
佐川　馨（SAGAWA　KAORU）
秋田大学・教育文化学部・准教授
研究者番号：４０４００５１９

研究成果の概要（和文）：本研究では，秋田県内各地域の「郷土の音楽素材」を，①伝統音楽的音楽素材(民謡，お囃子，わらべうたなど)，②西洋音楽的音楽素材(明治以降の秋田県関連の作曲家の音楽作品や著作など)，③生涯音楽的音楽素材(県内各地域における特色ある文化施設や音楽活動，人材など)の三つに分類して教材開発するとともに，開発した教材を用いた大学における授業実践と大学教員によるアウトリーチ活動によってその有効性を検証した。その結果，「地域の音楽素材」は，親近感の高まりが楽曲の魅力や価値を好意的に受け入れようとする態度生成を促進し，学習意欲を高めることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This study classifies the "raw materials of music in the community" into the following three categories:

① Raw materials from traditional music (e.g., folk songs, musical accompaniment called *ohayashi*, children's songs)
② Raw materials from western music (e.g., pieces of music and writings by composers native to the local community in and after the Meiji era)
③ Raw materials from music for life (e.g., local musicians, cultural facilities, musical activities with special quality)

Based on the above, it has discussed the possibility of utilizing "raw materials of music in the community" as part of the Department's music education materials.

As a result, it has been made clear that, "raw materials of music in the community," because of their familiarity to students, can contribute to generating a positive attitude toward favorably accepting the appeals of music and its value, thus enhancing their motivation for learning.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１０年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１１年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：音楽科教育
科研費の分科・細目：教育学・教科教育学
キーワード：郷土の音楽、教材開発、アウトリーチ、教員養成、音楽科教育

１．研究開始当初の背景

(1)平成 10 年の学習指導要領の改訂以来、学校音楽教育においては「郷土の音楽」を含めた日本の伝統音楽の取り扱いがこれまで以上に重視されている。また、3 月に改訂された新学習指導要領においても、我が国や郷土の伝統音楽に対する理解を基盤として、我が国の音楽文化に愛着をもたせる指導の一層の充実が求められることとなった。しかし、雅楽や箏曲、長唄といった日本の古典音楽に関わる研究や授業における実践例は多く見られるものの、「郷土の音楽」に関わる論考や授業実践は少ない傾向にある。

このことは、筆者が 2005 年 10 月から 11 月に行った「秋田県における『郷土の音楽』の取り扱い」の実態調査(配布数 326、回収率 50.6%)の結果からも明らかである。秋田県内 165 校(小 78、中 51、高 36)からの回答では、「郷土の音楽」を「取り扱っている」が、小学校で 23.8%、中学校では 36.7%、高等学校では 22.6%であった。同じ調査の「日本の音楽」の取り扱いが、小学校で 64.1%、中学校で 98.0%、高等学校では 67.7%となっていることと比べれば、その取り扱いの割合が極めて低いことは明らかである。

「取り扱っている内容」についての自由記述では、小学校ではわらべうたと和太鼓による地元のお囃子等、中学校では「総合的な学習の時間」とのかかわりによる郷土の民俗芸能や民謡、高等学校では『浜辺の歌』などの地域出身の作曲家による唱歌などとなっており、教材の取り扱いについて偏りがみられた。

「取り扱わない理由」について、小学校では「教材がない」が 57.6%と最も高い比率となっている。中学校では「時数が足りない」が 73.3%と高い比率となっているが、「教材がない」(20.0%)「指導方法が分からない」(20.0%)「他の内容に力を入れている」(46.6%)と合わせて考えれば、教科の目標を効率よく達成できる教材開発がなされれば取り組みが増えることが期待される。高等学校では 45.8%が「教材がない」を最も大きな理由としているが、「他の内容に力を入れている」(37.5%)という回答の比率も多い。中学校の回答でも「他の内容に力を入れている」が 46.6%と高い比率になっていることと合わせて考えれば、これは教師自身が郷土の音楽の価値や教材性を認識していないことによる結果と推察される。このことの解決のためには、教員養成段階での郷土の音楽素材を活用した教材の導入が必要であると考える。

(2)地域貢献は大学教育に係わる今日的な課題の一つである。「地域に開かれた大学」「地域に頼られる大学」「地域とともに歩む大学」として地域社会との結び付きを深めていくことは、これまで以上に強く求められるであろう。また、大学教員に対しても、学内における教育と研究に加えて、地域との連携、協働による教育活動の推進が求められる。そのような状況において、大学教員の「知」と「技」を活用したアウトリーチ活動が課題解決の有効な手立てと考える。

これまで音楽に係わるアウトリーチは、文化施設や芸術団体を中心に取り組まれてきたが、大学教員による「芸術普及」「教育普及」の取り組みは、地域と大学の結び付きを深める鍵になると考える。本研究の推進によって大学教員の「知」と「技」が地域の教育に直接的に貢献することとなり、地方の教員養成系大学としての新たな役割を果たすことも期待できるであろう。

２．研究の目的

本研究は、秋田県内各地域の「郷土の音楽素材」を教材化し、下記 3.に示す三つの実践と検証を通して学校音楽教育における地域の音楽文化遺産の伝承と地域の音楽文化振興、さらには時代の要請に応じた教員養成に資することを目的とする。

３．研究の方法

本研究では「郷土の音楽素材」を、①伝統音楽的音楽素材(民謡、お囃子、わらべうたなど)、②西洋音楽的音楽素材(明治以降の地域出身の作曲家による唱歌などの音楽作品)、③生涯音楽的音楽素材(音楽系部活動、県内各地域における特色ある音楽活動、音楽施設など)の三つに分類して研究に取り組む。

具体的な取り組みと概要は次のとおりである。

ｉ)「郷土の音楽素材」の教材開発とライブラリの設置、運営

・上記①に係わる映像、音源資料を現地取材調査によって収集し、「郷土の音楽素材」の教材用 DVD、CD、解説資料を作成する。
・上記②については、関連する書籍、楽譜を収集するとともに、研究分担者とともにレコーディングし、CD を制作する。
・上記③については、県内各地域の特色ある活動をしている音楽系部活動、音楽団体、個人、施設の一覧を作成する。
・以上についてデータベースを作成し、Web 上で検索できるようにし、必要に応じてデー

タ提供やレファレンス・サービスを行う。また、開発作成した教材は希望する学校に配布する。
ⅱ）「郷土の音楽教材」を活用した大学教員によるアウトリーチ・プログラムの開発と実施
・作成された教材、楽曲を活用した大学教員によるアウトリーチ・プログラムを開発・実施する。具体的には、市民向けレクチャー・コンサートとワークショップ、学校向けの出前授業を行う。
ⅲ）教員養成における「郷土の音楽教材」の導入と実践
・学部、大学院の授業において「郷土の音楽教材」を導入し、教材の有効性の検証とともに教員養成の場からの郷土の音楽文化遺産の伝承を試みる。

４．研究成果

本研究の主な成果は、収集したライブラリを活用した①教員養成における取り組み(学部、大学院の専門科目における郷土の音楽教材の導入と効果の検証)、②開発した教材の関係機関及び学校への配布、③市民向けアウトリーチ･プログラムの開発と実施の三点である。

①については、地域にかかわりのある音楽家の作品を活用した教員養成カリキュラムを構築し、学部および大学院で授業実践を行った。受講学生の変容の考察を通して教員養成における「地域の音楽素材」活用の可能性について検討した結果、「地域の音楽素材」は、親近感の高まりが楽曲の魅力や価値を好意的に受け入れようとする態度生成を促進し、学習意欲を高めることが明らかとなった。このことは教員養成だけでなく、学校教育においても同様の効果が期待できると考えられる。

②については、当初の計画では民俗芸能等の伝統音楽的素材の映像教材も制作する予定であったが、近隣の大学の研究プロジェクトと大きく重複することが明らかとなったため、西洋音楽的素材に特化することとした。学校教育と社会教育の双方で活用可能なものという視点からDVDとCD教材を制作し、県内の図書館、高等学校、各地方教育委員会等に配布した。

③については、市民向けアウトリーチとして、ライブラリを活用したレクチャー・コンサートを定期的に開催した。また、地域関連の音楽家の作品だけの解説付き声楽講座を行うとともに、講座と並行して収集した作品（楽譜)、著作、文献、録音資料等の公開を行った。

本研究課題では、「郷土の音楽素材」による教材開発と、その教材を活用した大学教員のアウトリーチ・プログラムを連動させた地域の音楽文化遺産伝承と時代の要請に応じた教員養成を目指した。三年間の研究を通して、当初の目的はほぼ達成できたと考える。

この研究で得られた成果を今後の大学教員のアウトリーチおよび地域の教育に貢献できる教員の養成に役立てていきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 8 件）
①佐川　馨、音楽科教員養成における「地域の音楽素材」活用の試み、日本教育大学協会研究年報、査読有、30 巻、2012、55-66
②桂　博章、東北（日本海側）の民俗音楽における楽器の分布、民俗音楽研究、査読有、36 巻、2011、83-85
③原　義彦、公民館の経営診断についての検討―診断、成果、改善・整備の連関に着目して、日本生涯教育学会論集、査読有、32 巻、2011、43-52
④佐川　馨、二つの県民歌≪秋田県民歌≫≪県民の歌≫制定の背景(1)―郷土教育の隆盛と≪秋田県民歌≫―、秋田大学教育文化学部研究紀要教育科学、査読無、66 集、2011、63-71
⑤桂　博章、郷土芸能の学習における「口唱歌」の役割、音楽表現学のフィールド(日本音楽表現学会編)、査読有、2010、244-253
⑥原　義彦、公民館機能の有効性と診断についての予備的考察、日本生涯教育学会論集、査読有、31 巻、2010、53-62
⑦佐川　馨、学校教育創始期の秋田県における音楽教員の系譜、秋田大学教育文化学部研究紀要教育科学、査読無、65 集、2010、27-38
⑧原　義彦、学校、家庭、地域の関係把握の試み～学校と地域の連携を推進するために～、信濃教育、査読無、1480 号、2009、9-18

〔学会発表〕（計 19 件）
①佐川　馨、秋田が生んだ音、音楽―先人の音の遺産、秋田県高等学校音楽研究会、2012.3.15、秋田県総合教育センター(秋田)
②桂　博章、秋田県北部の『獅子・駒・奴踊り』の伝承法と伝承組織について、日本民俗音楽学会第 25 回沖縄大会、2011.12.18、沖縄県立芸術大学（沖縄）
③佐川　馨、秋田が生んだ音、音楽―先人の音の遺産、秋田大学公開講座第 3 回、2011.12.11、秋田大学 60 周年記念ホール(秋田)
④為我井寿一、声楽講座―秋田の歌曲を歌う―、秋田大学地域貢献室、2011.11.13～12.18（５回)、秋田大学 60 周年記念ホール(秋田)

⑤斎藤　洋、第８回アトリオンピアノフェスティバル、秋田県知事部局、2011.10.27、アトリオン音楽ホール(秋田)
⑥為我井寿一、斎藤　洋、芸術鑑賞教室、潟上市教育委員会、2011.9.12、市立大久保小学校(秋田)
⑦斎藤　洋、憩いのコンサート第８回サロンの気分で、秋田大学地域貢献室、2011.5.28、秋田大学インフォメーションセンター(秋田)
⑧為我井寿一、秋田大学公開講座「声楽講座」の試みについて、日本教育大学協会全国音楽部門大学部会、2011.5.21、長崎ブリックホール(長崎)
⑨爲我井壽一、第３回秋大憩いのコンサート―、秋田大学社会貢献室、2010.12.25、秋田大学インフォメーションセンター(秋田)
⑩桂　博章、日本の民俗音楽における楽器の分布」の「東北地方における楽器の分布」、日本民俗音楽学会第 24 回全国大会、2010.12.19、東京能楽堂（東京）
⑪原　義彦、公民館の経営診断についての検討－診断名、改善、改善の成果の連関に着目して－、日本生涯教育学会第 31 回大会、2010.11.27、国立教育政策研究所社会教育実践研究センター(東京)
⑫佐川馨，斎藤洋，爲我井壽一、第３回《秋田の作曲家たち－先人の音の遺産を辿る》、秋田大学＜郷土の音楽素材ライブラリ＞、2010.11.27、秋田大学インフォメーションセンター(秋田)
⑬爲我井壽一，斎藤洋、第５回「浜辺の歌音楽祭」、北秋田市「浜辺の歌音楽祭」実行委員会、2010.11.13、北秋田市文化会館(秋田)
⑭爲我井壽一，斎藤洋、第１回秋大憩いのコンサート―秋田の作曲家「成田為三の世界」―、秋田大学社会貢献室、2010.10.30、秋田大学インフォメーションセンター(秋田)
⑮佐川馨，斎藤洋，爲我井壽一、第２回《秋田の作曲家たち－先人の音の遺産を辿る》、秋田大学＜郷土の音楽素材ライブラリ＞、2010.10.16、仙北市角館町平福記念美術館(秋田)
⑯佐川馨，斎藤洋，爲我井壽一、第１回《秋田の作曲家たち－先人の音の遺産を辿る》、秋田大学＜郷土の音楽素材ライブラリ＞、2010.9.18、仙北市角館町平福記念美術館（秋田）
⑰爲我井壽一、秋田大学音楽教育講座自由研究演奏会、2010.2.22、アトリオン音楽ホール(秋田)
⑱原　義彦、公民館機能の有効性と診断についての予備的考察、日本生涯教育学会第 30 回大会、2009.11.7、国立教育政策研究所社会教育実践研究センター(東京)
⑲佐川　馨、音楽科教育における地域素材活用のすすめ―地域の音楽素材の地産地消―、平成 21 年度小中学校音楽科研修会、2009.8.4、秋田市教育研究所(秋田)

〔図書〕（計３件）
①佐川　馨ほか、シンフォニックス、秋田が生んだ音、音楽―先人の音の遺産を辿る（DVD）、2012、120 分
②佐川　馨ほか、シンフォニックス、秋田が生んだ音、音楽―先人の音の遺産を辿る（CD）、2012、70 分
③浅井経子、山本恒夫、原義彦ほか、理想社、生涯学習概論―生涯学習社会への道－、2010、245

６．研究組織
(1)研究代表者
佐川　馨（SAGAWA　KAORU）
秋田大学・教育文化学部・准教授
研究者番号：40400519

(2)研究分担者
桂　博章（KATSURA　HIROAKI）
秋田大学・教育文化学部・教授
研究者番号：60185832

斎藤　洋（SAITOU　YOU）
秋田大学・教育文化学部・准教授
研究者番号：70186972

爲我井壽一（TAMEGAI　HISAKAZU）
秋田大学・教育文化学部・准教授
研究者番号：80431617

原　義彦（HARA　YOSIHIKO）
秋田大学・教育文化学部・准教授
研究者番号：70284825